

『大阿弥陀経』訳注（四）

辛 嶋 静 志

はじめに

今回訳出したのは、阿弥陀仏の国土にいる菩薩・阿羅漢に関する記述である（大正蔵第12巻，305c16～307a3）。彼らは阿弥陀仏国のもとでそれぞれの仏道修行を続ける。また、彼らは、午前中、八方上下の無数の仏を供養して、昼前に阿弥陀仏のもとへ戻ってくるという。これは、阿弥陀仏が菩薩であった時立てた二十四願のうち第十三願が成就した様に他ならない。

底本には高麗蔵所収本を用い、『中華大蔵経』第9巻所収の金蔵広勝寺本などを参照にした。なお、訳の部分は、1995年から1997年春まで真宗教学研究所で行われた『大阿弥陀経』研究会で、竹橋太氏が下訳を準備し、私が大いに手を入れたものを参考にした。

和訳

（大正蔵第12巻，305c16～307a3）

「¹⁾菩薩・阿羅漢の中には、経だけを聞きたいものもいるし、音楽だけを聴きたいものもいるし、花の香りだけを嗅ぎたい²⁾ものもいるし、経を聞きたいと思わないものもいるし、音楽の音を聞きたいと思わないものもいるし、花の香りを嗅ぎたいと思わないものもいる。聞いたり嗅いだりしたい物があれば³⁾、すぐさま⁴⁾その人だけ

1) この一段（305c16～306a1）は、『平等覚経』にのみ対応する文があり（285c4～26）、他の諸本にはない（香川 1984: 211参照）。

2) 聞 「聞」には「臭いを感じる」「嗅ぐ」という意味もある。

3) 其所欲聞者 この「聞」は、「聞く」と「嗅ぐ」の両方の意味で使われている。

4) 輒即 『平等覚経』は「輒則」と改めている（285c7）。いずれも辞書類には採られていない。「輒即」は竺法護訳『生経』T, vol. 3, No. 154, 70a-5, 同じ訳者の『漸備一切ノ

に聞こえ香ってくる。聞いたり嗅いだりしたくなければ、その人にだけ声も香りもとどかない。すべて（人々の）思うがままであり⁵⁾、願いにたがうことはない。

水浴しおわると、それぞれ（七宝池を）去って、修行をする⁶⁾。

地上で、経を講じる者、経を暗誦する者、経を説く者、経を口授する者、経を聴く者、経を念じるもの、仏道を思念する者、坐禅をする者、経行（きんひん）をする者がいる。空中で、経を講じる者、経を暗誦する者、経を説く者、経を口授する者、経を聴く者、経を念じるもの、仏道を思念する者、坐禅で心を集中する者、経行をする者もいる。（このように修行して）須陀洹道をまだ得ていない者は、すぐに須陀洹道を得、まだ斯陀含道を得ていない者は、すぐに斯陀含道を得、まだ阿那含道を得ていない者は、すぐに阿那含道を得、まだ阿羅漢道を得ていないものは、すぐに阿羅漢道を得、まだ不退転の菩薩になっていないものは、すぐに不退転を得る。（このように）それぞれ教えを説き、仏道を行い⁷⁾、(306a) みな仏道を成就して、みな飛び上がるほど喜ぶ。

⁸⁾ある菩薩たちに、八方上下の無数の仏たちを供養したいという思いが起これば、彼らは、みな⁹⁾前に進んで仏に礼拝し、仏に申し上げる。

『おいとまして¹⁰⁾、八方上下の無数の仏たちを供養しに行ってきます。』

仏はすぐに許可を与え¹¹⁾、行かせる。菩薩たちはみな大変喜ぶ。

数千億万、無数、無量の彼らは、みな智慧あり、勇敢である¹²⁾。その彼らが群を

ㄨ 智徳經』T, vol. 10, No. 285, 490c29, 『諸佛要集經』T, vol. 17, No. 810, 761c27などにも見える。外典では、用例は遅く、『舊唐書』卷七十一「列傳」第二十一「魏徵傳」, 中華書局本, p. 2549, l. 3や『唐律疏議』に見える。

5) 隨意所欲喜樂 『平等覺經』は「隨意在所欲喜樂」と改めている(285c8)。「隨意所～」はKrsh (1998). 433; Krsh (2001). 260を参照。「欲喜樂」は類義字を三つ重ねた表現。前に「恣若隨意所欲好喜」(305c3)という類句が出た(訳注[三]注[96]を参照)。

6) 各自去行道 あるいは「それぞれ修行へむかう」。『平等覺經』は「各自去。其諸菩薩, 阿羅漢各自行道」と敷衍している(285c8)。「行道」は訳注(一)注(23), (85)を参照。

7) 説經行道 訳注(一)注(85)を参照。

8) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 282~283を参照。第十三願が成就した様を描いている。

9) 皆俱 類義字を重ねた語。従来の辞書類に採られていないが、仏典にはよく出る。Krsh (1998). 216参照。

10) 辭行 「告別」と同じ様な表現。古典から見える表現。Cf. HD.11.502a.

11) 然可 類義字を重ねた語。おそらく、本經の例が最も古い。呉金華『世說新語考釋』合肥(安徽教育出版社), pp. 221~222には『世說新語』と仏典の例を挙げている。

12) 皆悉智慧勇猛 底本の「皆當」を「皆悉」に改める。本經の別の箇所「皆悉智慧勇猛」(307c4), 「悉皆智慧勇猛」(303c23)とあるのを参照。あるいは「皆普」(cf. Krsh [1998]. 217; ZXYL.409)の誤りかも知れない。『平等覺經』は「皆」としている(286a2)。

なして飛び立ち¹³⁾、次々にあとを追い、みな¹⁴⁾(四方八方に)飛び散り、八方上下の無数の仏たちのもとに到る。みな前に進んで、仏たちを礼拝し、すぐさま¹⁵⁾供養をする。自然に(生じる)あらゆる種類の物が目の前に現れることを望むと、すぐさま自然の百種の色とりどりの花、百種の色とりどりの綾錦¹⁶⁾、百種の木綿¹⁷⁾の衣、七宝のランプ¹⁸⁾、あらゆる音楽と舞、なんでも目の前に現われる。これら花とその香りなど、あらゆる種類の自然に生じた物は、この世界の物でもないし、天界のものでもない。これらあらゆる種類の物は八方上下(の世界)の(最高の)物がみな自然に集まってあらわれたものだ¹⁹⁾。欲しいと思えば、さっと現れ、用がないと思えば、すっと消える。そこで菩薩たちはみんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちに供養する。(それら供物は、仏たちの)傍らであれ、前後であれ、ぐるりと周り全体であれ²⁰⁾、望むがままに²¹⁾、みなさっと²²⁾現れる。その時の心地よさは、えも言われな

- 13) 各自幡輦飛相追 『平等覺經』は「各自翻飛，等輦相追」と改めている。類似した句が本經の別の箇所にも出る。310a4f.「其人壽命欲終時，阿彌陀佛即自與諸菩薩，阿羅漢共翻輦飛行，供養八方上下諸無央數佛」とあり、『平等覺經』は「……翻飛行迎之。……番輦飛行，……」(291c24f.)と改めている。311c1f.「諸菩薩，阿羅漢衆等……遊戲洞達，俱相隨飛行，翻輦出入，供養無極」は、『平等覺經』で「翻輦」(v.l. 翻)輦出入(291c20)と改められている。「幡輦」「番輦」「翻輦」はおそらく「翻輦」の訛。「翻輦」(bān. DK.7.1138; HD.-)は、『広雅』釈詁，卷一「同，儻，等，翻，……，輦也」(王念孫『広雅疏証』卷一上を参照。「翻輦之言班也」とある様に、「輦」の同義語。窺基の『妙法蓮華經玄贊』も『広雅』のこの項を引用して、「『広雅』等，翻(v.l. 翻)，輦，亦類也」(大正34卷，No. 1723, 708c8)と記している。同義字を重ねた「翻輦」(bān bèi)は、bで始まる語を重ねた双声語でもある。おそらく、本經では「群をなして」「大挙して」「大勢で」という意味で使われているのであろう。
- 14) 俱共 同義字を重ねた語。Krsh (1998). 240, Krsh (2001). 149を参照。
- 15) 即便 同義字を重ねた語。Krsh (1998). 195, Krsh (2001). 124を参照。
- 16) 繒綵 彩色した絹織物。HD.9.1023a, DK.8.1176c, Krsh (1998). 575を参照。
- 17) 劫波育 MC. kjpp pwā jiuk. Skt. *kārpāsika*, BHS. *karpāsika*, Pa. *kappāsika* (木綿の布)に対応する音写語。
- 18) 七寶燈火 『平等覺經』の訳者はこの語を誤解して、「自然七寶，自然燈火」(286a7)と二つに分けている。
- 19) 是萬種物，都八方上下，衆自然合會化生耳 「其七寶地，諸八方上下衆寶中精都(←味)自然合會，共(←其)化生耳」(303b24)、「其亂風者，亦非世間之風，亦非天上之風，都八方上下衆風中精，自然合會化生耳」(305c5)とあるのを参照。
- 20) 邊傍前後迴遶周匝 「邊傍」(cf. HD.10.1295b)、「迴遶」(cf. HD.10.779b. 迴繞; HD.3.618b. 回繞)、「周匝」(cf. HD.3.295a)は、いずれも同義字を重ねた語。
- 21) 在意思欲，即輒皆至 『平等覺經』は「自在意思欲得，則輒皆至」(286a13)に改めている。梵本には、*yathā cittam utpādayanty sahaçittotpādāt tathārūpāny eva sarvavijāvidhānāni pānau prādurbhavanti* (……を心に望めば、その気持ちが生じると同時に、まさに望み通りのあらゆる種類の供物が掌に出現する)とある。「在意思～」は「隨意所～」(訳注[三]，注[96]，Krsh [1998]. 433; Krsh [2001]. 260を参照)と同じ意味。「在」だけでも「自在」と同じ意味になる(Krsh [2001]. 353を参照)。
- 22) 即輒 「即輒」は類義字を重ねた表現。辞書類に採られていない。

23) (仏に供養をする) 菩薩たちが、それぞれ、四十里²⁴⁾の大きさの花²⁵⁾を望むと、すぐさまぱっと目の前に現れる。そこで、空中で、みんなで一緒にそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いて留まる。花はとても香り、またきれい。少し萎んで下に落ちると、すぐさま自然のつむじ風が吹いて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、八十里の大きさの花を望むと、すぐさまぱっと目の前に現れる。みんなで一緒にそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、花はみな空中で下を向いて留まる。少し萎んで地面に落ちると、すぐさま自然のつむじ風が吹いて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、百六十里の大きさの花を望むと、すぐさまぱっと目の前に現れる。そこで、空中で、みんなで一緒にそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、花はまたみな空中で下を向く。少し萎んで地面に落ちると、すぐさま自然のつむじ風が吹いて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、三百二十里の大きさの花を望むと、すぐさまぱっと目の前に現れる。やはり、空中で、それらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、花は空中で下を向く。少し(306b)萎んで地面に落ちると、すぐさま自然のつむじ風が吹いて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、六百四十里の大きさの花を望むと、すぐさまぱっと目の前に現れる。やはり、それらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、花は空中で下を向く。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風がすーっと吹いてきて、萎んだ花はなくなる。菩薩たちが、それぞれ、千二百八十里の大きさの花を望むと、すぐさまぱっと目の前に現れる。やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風がすーっと吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、二千五百六十里の大きさの花を望むと、すぐさまぱっと目の前に現れる。やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎

23) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 284~5を参照。本経と『平等覚経』との記述は、他の諸本に比べて、遙かに長く詳しい。

24) 四十里 以下、梵本の1 *yojana* (由旬)を四十里で計算している。

25) 華 梵本では、「望みのままの花束 (*puṣpapuṭa*) が菩薩たちの掌の中に生じ、それを菩薩が仏たちの上に撒くと、それらは、十、二十、……百千由旬の華蓋 (*puṣpacchatra*) となって、空中に出現する」とある。本経でもおそらく、「四十里、八十里、……六百万里の大きさの華(蓋)を望むと、(花々が)すぐさまぱっと目の前に現れる。そこで、空中で、みんなで一緒にそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(四十里、八十里、……六百万里の大きさの華蓋になって)空中で下を向いて浮かぶ」という意味であろう。

んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、五千一百二十里の大きさの花を望むと、すぐさまぱっと目の前に現れる。やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、一万二百四十里の大きさの花を望むと、すぐさまみなぱっと目の前に現れる。やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らす(と、花はみな空中で下を向いてとどまる)。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、二万四百八十里の大きさの花を望むと、すぐさまみな目の前に現れる。やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、五万里の大きさの花を望むと、すぐさまみな目の前に現れる。やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、十万里の大きさの花を望むと、すぐさまみな目の前に現れる。やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、二十万里の大きさの花を望むと、すぐさまみな目の前に現れる。(306c)やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、四十万里の大きさの花を望むと、すぐさまみな目の前に現れる。やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、八十万里の大きさの花を望むと、すぐさまみな目の前に現れる。やはり、空中で、みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、百六十万里の大きさの花を望むと、すぐさまみな目の前に現れる。みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、(花は)みな空中で下を向いてとどまる。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっ

となくなる。菩薩たちが、それぞれ、三百万里の大きさの花を望むと、すぐさまみな目の前に現れる。みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らす。少し萎んで地面に落ちると、つむじ風が吹いてきて、萎んだ花はみなすっとなくなる。菩薩たちが、それぞれ、六百万里の大きさの花を望むと、すぐさまみな目の前に現れる。みんなでそれらを仏たちと菩薩・阿羅漢たちの上に散らすと、花はすーっと集まって一つの華（蓋）²⁶⁾になる。（この）華（蓋）はまん丸²⁷⁾で、周囲（の形）はみな同じ。（上述のように）華（蓋）は倍々に大きくなり、その大きさが倍になると、数千百倍いやましにすばらしくなる²⁸⁾。色とりどり、香りもさまざまで²⁹⁾、えも言われぬ芳しさ。

³⁰⁾菩薩たちはみな大いに歓喜し、みな空中で一緒に³¹⁾、様々な音や自然な舞と音楽を演じ、仏たちや菩薩・阿羅漢たちを楽しませる。その時、えも言われないほど心地よい。

菩薩たちはみな³²⁾後ろに下がって坐って、教え³³⁾を聴く。教えを聴き終わると、すぐにみな暗誦し、理解し³⁴⁾、ますます（仏の）教え³⁵⁾を知り、ますます智慧が磨かれる³⁶⁾。

すぐさま、それぞれの仏国の（下から）一番の四天王天から（二番の）三十三天まで³⁷⁾の神々がみな³⁸⁾天上（に生じた）あらゆる種類の自然の物をもって降りてきて、

26) 華 梵本では「華蓋」(*pūṣpacchātra*)とある。前注参照。

27) 端圓 「端圓」は辞書類に採られていない。『平等覺經』には「團圓」とある。「團圓」は「まるい」という同義字を重ねた表現で、辞書にも採られているし(HD.3.663a.唐代)、他の漢訳仏典にも多数の用例がある。おそらく、本經のこの箇所は本来は「崑圓(あるいは員)」と書かれていたのではないだろうか。「崑」(*duān, zhuān*. HD.8.778a)は「端」の古い字形だが、ここでは「圖」(*tuán*. HD.3.650a.=團 *tuán*)の省略形として書かれていたのであろう。「圖圓」という表現は見つからないが、「員(=圓)圖」(まるい)という表現が漢代の『論衡』に見える(HD.3.361a)。おそらく、「まるい」という意味の「崑圓」を、後に本經を筆写した人は、新字を使って「端圓」と誤って書き改め、一方、『平等覺經』の訳者は、「崑」を「圖」の訛と正しく認識して、同義字の「團」に置き換えたのであろう。

28) 極自軟好 訳注(一)注(13)参照。

29) 色色異香 訳注(三)注(31)参照。

30) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 286~7を参照。

31) 大共 「(大勢で)一緒に」の意味。HD.2.1135bにも後漢代の例を挙げている。

32) 皆悉 同義字を重ねた表現。漢訳仏典から見える。Krsh (1998). 217, Krsh (2001). 135を参照。

33) 經 訳注(一)注(19)を参照。

34) 諷誦通利 本經には「諷誦通」とあるが、『平等覺經』(287a12)により改める。本經でも後には「諷誦通利」(307c1)と出る。

35) 經道 訳注(一)注(4), (19)を参照。

36) 重知經道, 益明智慧 あるいは「ますます教えと智慧をはっきりと知る」の意味か。「重」と「益」、「知」と「明」はそれぞれ類義。

37) 第一四天上至三十三天上 『平等覺經』には「第一四天王上至三十六天上」(287a15) /

菩薩・阿羅漢たちを供養する。神々はみな空中で一緒に様々な音や舞・音楽を演じる。先に来た神々は順にその場を去り、後から来る神々の邪魔にならないようにする。後から来た者たちも前の者たち同様に、順々に³⁹⁾供養して、お互いに邪魔にならないようにする⁴⁰⁾。神々は歓喜し、教えを聴き、大勢で一緒に音楽を奏でる。この時の心地よさは極まりない。

菩薩たちは供養をして、教えを聴きおわると⁴¹⁾、みな立ち上がって、(それぞれの仏国土の) 仏を礼拝し、(その仏国土から) 去り、すぐさまさらに(307a) 飛んで八方上下の無数の仏たちのもとにいたり、みな⁴²⁾ 上述のように(仏たちを) 供養し、教えを聴く。(こうして諸仏国を) すっかり一巡りして後、お昼前に、みなその(阿彌陀の) 国に戻り、阿彌陀仏を礼拝して、後ろに下がって坐って、教えを(聴く。教えを) 聴きおわって⁴³⁾、大いに歓喜する。」

注

注で使用した略号は次の通り：

BHS=Buddhist Hybrid Sanskrit

Coblin=W. South Coblin, *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, Hong Kong 1983 (The Chinese University Press).

DK=諸橋轍次著『大漢和辞典』全13冊, 東京1955-60 (大修館書店)。

ゝとある。本経の別の箇所には「第一四天王, 第二切利天上至三十二 (u.l. 三) 天上」(307b2) と見え、その『平等覚経』の対応箇所には「第一四天王諸天人, 第二切利天上諸天人, 第三天上諸天人, 第四天上諸天人, 第五天上諸天人, 第六天上諸天人, 第七梵天上諸天人, 上至第十六天上諸天人, 上至三十六天上諸天人」(287c6f.) とある。しかし、インドの仏典では、欲界六天・色界十八天・無色界四天の二十八天しか知られない (チベットで出来た *Mahāvvyūṭpatti* No. 3078f. は欲界に八天を挙げ、全部で三十天)。本経の「三十三天」はいわゆる「切利天」のことであろう。本経の別の箇所に見える「第二切利天上至三十三 (←二) 天上」は誤訳か、あるいは「第二切利天」は本来註釈の語だったものが本文に紛れ込んだものと思われる。『平等覚経』の訳者は、本経の誤りをさらに増幅させて、三十六天などという表現を捏造したと考えられる。なお、『無量壽經連義述文贊』(大正37巻, No. 1748, 168c~169a) もこの問題に触れている。

38) 皆共 同義字を重ねた表現。漢訳仏典から見える。Krsh (1998). 216, Krsh (2001). 134を参照。

39) 轉復 仏典からみえる表現。この「復」は二音節にするために加えられた接尾辞でそれ自体は意味がない。Zhu 150, Krsh (1998). 607, Krsh (2001). 370を参照。

40) 更相開避 「更相」は仏典以前から見える表現。「開避」は類義字を重ねた表現で、「さける, ゆずる」の意味。辞書類に採られていない。仏典には頻出するが、古典には見られない表現。古典では「避開」が使われる。

41) 訖竟 同義字を重ねた表現。Krsh (1998). 325を参照。

42) 皆各 漢訳仏典から見える表現。訳注(三)注(22)を参照。

43) 聽經竟 『平等覚経』には「聽經。聽經竟」(287a24) とある。本経の読みは、誤って「聽經」が一つ落ちた結果であろう (所謂重字脱落 [haplography])。

HD=漢語大詞典, 全13冊, 上海, 1986~1994 (漢語大詞典出版社).

Krsh (1998) = *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 1998, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I).

Krsh (2001) = *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 2001, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica IV).

MC=Middle Chinese (表記方法は Coblin 1983: 41に準拠する)

MW=Monier-Williams, M., *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford, 1899.

Pa=Pāli

Skt=Sanskrit

Sukh (F) = *The Larger Sukhāvativyūha: Romanized Text of the Sanskrit Manuscripts from Nepal*, ed. Kotatsu Fujita, Tokyo 1992-1996 (Sankibo Press), 3 vols.

T=大正新修大藏經.

Zhu=朱慶之『佛典與中古漢語詞彙研究』, 台北 1992 (文津出版社).

ZXYL=董志翹・蔡鏡浩『中古虛詞語法例釋』, 長春 1994 (吉林教育出版社).

香川 1984=香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』京都 1984 (永田文昌堂).

訳注(一) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(一)』『佛教大学総合研究所紀要』第6号(1999), pp. 135-150.

訳注(二) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(2)』『佛教大学総合研究所紀要』第7号(2000), pp. 95-104.

訳注(三) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(三)』『佛教大学総合研究所紀要』第8号(2001), pp. 133-146.